

松本大生が長野市の道の駅中条と連携

実践力学び 地域元気に

長野県松本市の松本大学の学生は、長野市の道の駅中条と連携し、農産物の生産から加工、販売までを学びながら、地域を元気にしようという活動している。特産の大豆の栽培を体験し、新たな食品を開発。6次産業化の実践に携わり、住民と交流しながら地域活性化を目指している。

この取り組みは、今年で2年目。同大学と道の駅中条の指定管理者アクティオ

省長野国道事務所は昨年7

ゼミの3、4年生全員が参加した大豆収穫作業



大豆栽培体験、食品開発も 6次化で貢献へ

る。

昨年、道の駅のある同市中条地区を調査。地元

伝わる子育ての神様、山姥(やまんば)伝説にちなんだキーホルダーや、特産の大豆を活用した総菜パン「おからドッグ」を開発した。秋祭りや、これら商品を販売したり、ダンスイベントを企画したりして、地域のの人たちと交流した。

2年目の今年は、19人の学生が参加。道の駅副施設長の藤本人寿さんの手ほどきで大豆を栽培、種まきや収穫作業に汗を流した。大豆を活用した新たな食品の開発と道の駅の看板商品の「笹(ささ)おやき」のパッケージ製作などを進めている。3日に開かれた秋祭りでは、試作パッケージの商品を販売した。大豆食品は来年秋の完成を目指す。3年生が開発を引き継ぐ。昨年からは携わる、4年の阿部愛さんらは「地域と連携したプロジェクトは、いい学びになった」と手応えを感じている。

道の駅中条の下内光雄施設長は「道の駅を地域づくりの拠点とするために、今後も学生の力を借りていきたい」と意気込む。学生を指導する清水教授も「地域と関わることで実践力を身に付けることも、山里の振興に貢献したい」と話す。